

## サンプルコントロールメモリについて

[バッファリングエリア設定]において[サンプルバッファ使用する]に設定した場合、[システム設定]→[PLC通信]→[通信パラメータ]で設定した[読込エリア]n+3から、連番で最大3ワードが「サンプルコントロールメモリ」となります。

前述の[メモリ指定]のチェックあり/なしにかかわらず、サンプルコントロールメモリは[読込エリア]n+3～に割り付けられます。



例)  
以下の場合、サンプルコントロールメモリの先頭メモリはD3 (=読込エリア n+3) になります



- \* サンプルコントロールメモリのワード数は使用するバッファ No. の数によって異なります。(下図を参照してください)  
[サンプルバッファ使用する] チェックなしの場合は、[読込エリア]n+3～は使われません。
- \* サンプルコントロールメモリでは現在使用していないビットはすべて[0]に設定してください。

MSB											LSB								
15	14	13	12	11	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01	00				
U	S	R	T	U	S	R	T	U	S	R	T	U	S	R	T				
<b>サンプルコントロールメモリ</b>																			
= 読込エリア n+3				バッファ No. 3				バッファ No. 2				バッファ No. 1				バッファ No. 0			
n+4				バッファ No. 7				バッファ No. 6				バッファ No. 5				バッファ No. 4			
n+5				バッファ No. 11				バッファ No. 10				バッファ No. 9				バッファ No. 8			

T: トリガ

[サンプリング方式: ビット同期]の場合に有効となります。[0 → 1]のエッジで指定先のバッファ No. のデータをサンプリングします。

R: リセット

このビットが[1]の間、指定先のバッファ No. の内容をクリアし、サンプリングを行いません。  
[0]でサンプリングを実行します。  
([サンプリング方式: リレーサンプル]の場合、このビットは無効です。)

S: 正常運転ビット

[サンプリング方式: アラーム機能]の場合に有効となります。  
アラーム表示を制御するためのビットです。エラービットがOFFの間、このビットをONします。エラービットがONになった時点でこのビットをOFFします。このビットがOFFの間、一番最初にONしたエラービットが「1次要因」のエラーとして認識され、その他のエラーと区別されます。  
(アラーム機能について、詳しくは「10.3 アラーム表示 (履歴)」を参照)

**U: サンプル稼働中ビット/スタートビット**

[ サンプルング方式: アラーム機能 ] 以外で、[  スタートビット使用する ] チェックありの場合に、ON でサンプルングを開始し、OFF でサンプルングを停止します。

[ サンプルング方式: アラーム機能 ] の場合は、サンプルング開始から終了までの間、このビットを ON します。

\* このビットを ON しないと、エラービットが ON してもエラーメッセージは表示されません。

**バッファリングエリアのサイズ計算**

バッファリングエリアの使用容量は [ サンプルング方式 ]、[ 格納先 ] によって異なります。以下の計算式で容量計算してください。

**格納先: 内部バッファ (最大 32K ワード) の場合**

(単位: ワード)

サンプルング方式	計算式
ビット同期	(ワード数 + 2) × サンプル回数
定時サンプル	(ワード数 + 2) × サンプル回数
ビットサンプル	3 × サンプル回数
リレーサンプル	48 × ワード数
アラーム機能	3 × サンプル回数
温調ネット / PLC2Way	(ワード数 * + 2) × サンプル回数

\* 温調ネット / PLC2Way のワード数とは [ バッファリングエリア設定 ] の [ テーブル No. ] で設定した [ 温調ネット / PLC2Way テーブル [No.] で使用しているメモリのワード数です。

**格納先: SRAM の場合**

P 付 1-20 を参照してください。

**格納先: CF カードの場合**

P 付 1-30 を参照してください。